【土木史研究　講演集　Vol.29　2009年】

品川台場計画について- 新発見の絵図より-*

Study on Fort Shinagawa Project from a Newly Discovered Map

神吉　和夫**・肥留間　博***

By Kazuo KANKI ・ Hiroshi HIRUMA

要　旨：本稿では、品川台場に関する新発見の絵図について、その概要を示し、若干の考察を加える。本絵図の作成時期は記載の町打場等から 1850-3(嘉永 3-6)年頃である。第一～十一台場、洲、測量線、朱線で囲った亀甲洲、沖之洲などが描かれ、距離、水深が記されており、江川英龍による計画図と考えられる。第一～第六台場は大川(隅田川)の澪筋に位置し、台場間距離は西欧築城法の 8 町より短い。絵図の測量値から割り出した台場の位置は近代の地形図とほぼ一致する。

1. はじめに

1853(嘉永 6)年のペリー来航を契機に、海防を目的として江戸湾奥に建設された品川台場とその配置計画については、幾つかの絵図史料が存在するものの、必ずしも充分な研究は行われていない。今回、新たにその計画図と思われるものを発見したので、その概要を報告し、他の絵図とともに考察を加えることにする。

2. 江川太郎左衛門英龍と品川台場

品川台場の計画、建設に大きくかかわった人物として江川太郎左衛門英龍(1801(享和元)-55(安政 2))、江戸後期の西洋流兵学者・民生家、が著名である[1]。

江川英龍は 1835(天保 6)年代官職を世襲、天保 8 年に伊豆下田防御に関して砲台築造の急および江戸湾口防御を建議している。この時期、江川英龍は渡辺崋山、高野長英らと交際し、蘭学・洋学に基づく海防策を主張した。その後、モリソン号事件が勃発、海防の急務を認識した幕府は翌天保 9 年に江川英龍に江戸湾防備場の検分を命じている。天保 10 年蛮社の獄が起き、崋山・長英らは逮捕されたが江川英龍は免れ、天保 12 年、高島秋帆に洋学に基づく砲術を学び、後、江戸でこれを教授した。次いで、天保 15 年、オランダ使節、国書を幕府に呈し開国を勧告したが翌年の 1845(弘化 2)年、幕府はこれを拒否する。そして、翌弘化 3 年 3 月、江川英龍は伊豆諸島を巡視し、海防意見書を幕府に提出している。江川英龍は 1850(嘉永 3)年にも伊豆・下田防備の意見書を提出しているが、品川台場建設計画が具体化するのは嘉永 6 年のペリー来航直後からである。同年、江川英龍は勘定吟味役格海防掛となり、その後の品川台場建設に従事することになる。しかし、財政危機をかかえた幕府は江川英龍に意見を求めたが、計画の具体化にあたり、縮小を要求した。江川英龍の構想と幕府が財政難から縮小を要求したことは、「江川氏秘記」[2]にみられる。

「君ノ意ニテハ沖ノ洲亀甲洲共ヨリ富津ノ洲又ハ相州海岸猿島等ヘモ堅牢ノ砲臺取設ケ其上豆州下田湊浪速等ヘモ追々堅実ノ砲臺取建候積年去数ケ所一時ニ建築ハ不行届依之先ツ首府護衛ノ場所ヲ第一ニ建築共ヨリ順次ニ取建候積ヲ以品川沖ヲ始ニイタシ候」

「君勘定所ニ於テ一日品川砲臺建築ノ義ニ付勘定奉行川路左衛門尉ト意見ヲ異ニシ左衛門尉ハ減費額ヲ主トシ君ハ以テ不可トシ左衛門尉益説ケハ君ハ益屈セス云ク誠ニ如斯ハ失禮ノ申分ニハ候ヘ共竹ヘ縄ヲ付ケ品川ノ沖ニ立置モ同様ニテ詰リ砲臺建築ノ費ハ多少ニ拘ラス国家無益ノ費ト奉存候ト申サレケル」

3. 新発見の品川台場絵図(仮称)の概要

新発見の品川台場絵図(仮称)の全体を図-1、天地を逆にした品川台場部分の拡大図を図-2 に示す。絵図は和紙に淡彩色、大きさは竪 40cm 横 70cm。虫食いが激しい。陸地沿岸部は黄色、砂洲を暗灰色、海を薄灰色に色分けされている。

・台場の表記と位置　台場は番号と色名が付されている。一白・二青・三赤・四青・五赤・六白・七青・八白・九赤・十青・十一白。各台場の平面形状は一から六までが六角形、七が菱形、八から十一は四角形である。

各台場の位置をみると、第一から第六台場が江戸湾最奥で大川(隅田川)の澪筋となる位置にあり、各台場間の距離が一部記されている。第八から第十一台場が隅田

*　keyword：品川台場、江川英龍、計画図

**　正会員　博士(工学)
神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻
(〒657-8501　神戸市灘区六甲台町 1－1)

***　クオリ　代表
(〒176-0002　東京都練馬区桜台 2-14-9-105)

川と中川の渚筋間の洲の東部分に八丁(町)ずつ離れて直線的に並び、第七台場が第三-第八台場の第三台場寄り位置にある。なお、第八から第十一台場列の北側に同様の無記名の四角印が三つ、朱線で結ばれて描かれており洲崎弁天東の林播磨守・松平相模守屋敷方向に延び、それら四角印の間には杭と記されている。また、絵図中央に亀甲洲、沖之洲等三か所を矩形朱線で囲っている。これらは台場関連施設建造の候補であったと思われる。

大森村地先の海岸に黄土色の矩形に墨線で囲った地所が並び、丸山洲方向に延びる 2 本の杭列には町打場境杭、町打貟杭と記されている。これらは町打場で、幕府が 1850-52(嘉永 3-5)年に建設した大砲試射場である [3]。

・測量線　松平相模守屋敷の南角、御濱の南角、石川島西南隅、および品川宿から台場に向けて朱線があり距離が記されている。松平相模守屋敷の南角からは五本、他からは各一本である。距離は墨書き(町間)と朱書き(間)で同値である。墨書き(町間)は次の通りである。

石川島－第三 33 町 40 間 御濱－第三 25 町 30 間
松平相模守－第一 24 町 10 間 第二 19 町 50 間
第三 20 町 40 間 第五 19 町 30 間 第六 17 町 10 間

・台場間距離　次の通りである。(1 町=60 間=109m)

品川－第四 4 町 10 間 第四－第五 8 町
第一－第二 5 町 30 間 第二－第三 5 町 30 間
第三－第六 3 町 20 間 第五－第六 6 町 40 間
第七から第十一は 8 町間隔

第一～第六台場の台場間距離の多くは 8 町より小さい。8 町は 24 ないし 12 ポンドカノンの鉄葉弾最大射程「7 町 19 間 2 尺」に対応する距離である [4]。台場間隔の多くが西欧築城法に則っていない可能性が大きい。

・水深　品川宿から第一台場を経て第三台場近傍まで、および第八台場から第十一台場において深さが記されている。品川宿側から第三台場近傍までの深さを列記すると、9 尺 3 寸、9 尺 4 寸、1 丈 5 寸、9 尺 5 寸、9 尺 7 寸、9 尺 7 寸、1 丈 1 尺、1 丈、9 尺 5 寸、9 尺、8 尺となる。同様に第八台場から第十一台場のそれは 7 尺、6 尺 5 寸、6 尺、5 尺 5 寸、5 尺、5 尺、5 尺となる。後者は洲の上であるため浅く、陸側に向けてより浅くなっている。第一台場を経て第三台場近傍までの平均水深は 9 尺 5 寸 5 分(約 2.9m)である。

・作製年代　鉄砲洲から品川宿までの屋敷と町の名を列記すると、鉄砲洲－紀伊殿－松平アキ(安藝)、その陸側に松平越中・一橋殿－尾張殿－御濱－関但馬－紀伊殿－丹羽左京太夫－松平相模守－金杉町－間部下総守－芝田町－松平サツマ(薩摩)－松平ヲキ(隠岐)－伊東修理太夫－高輪町－松平薩摩守－有馬玄蕃頭－松平駿河守－品川宿となる。これを「御府内沿革図書」等と対照すると、1830(天保元)年を上限、1845-6(弘化 2・3)年を下限とする期間を示している。しかし、前述のよう絵図には 1850-52(嘉永 3-5)年に建設された町打場もみられることから、屋敷名を変えずに町打場を加えたとも考えられる。その場合、製作年代は嘉永初年となる。

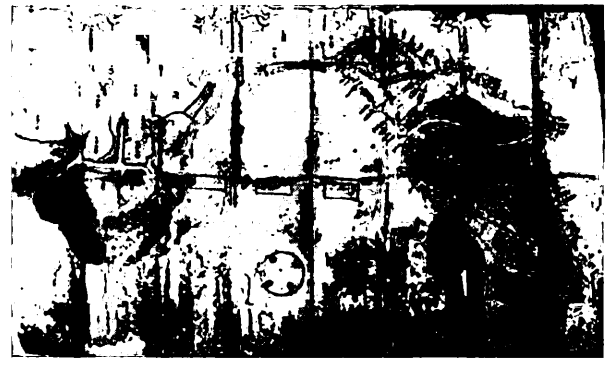

図-1　品川台場絵図(仮称)　全体図

図-2　品川台場部分の拡大図

4. 他の品川台場絵図との比較と新発見絵図の位置付け

(1)品川台場関係絵図

江戸湾での配置がわかる絵図 [5]は、①「品川台場計画図」[6]（首都大学東京図書情報センター水野家文庫蔵)、②「品川台場計画図－黒船来航図絵巻」(横浜開港資料館蔵)、③「洲崎海岸絵図」[7]（東北大学付属図書館狩野文庫蔵)、④「品川台場及沿岸絵図」(立正大学図書館田中啓爾文庫蔵）、近代の図であるが⑤「内海御臺場(本芝ヨリ品川宿迄)海岸圖」(『陸軍歴史』所収)、および⑥「惣体御砲台一覧絵図」(都立中央図書館東京特別文庫室蔵)である。新発見の図を⑦とし、それらを描かれている台場、測量線、水深、屋敷名、町打場、洲、方位により比較し表-1 に示す。

・①「品川台場計画図」　図面は品川台場配置図(図-3 参照)と各台場からの砲撃射程方向図の 2 点あり、製作年は 1838(天保 9)年とされている [9]。品川台場の配置図には、洲の描写はないが、品川の沖合いから深川までの間に、一番台場から十一番台場までが各八丁(町)程の距離をおいて描かれ、各台場の陸からの距離、側面の間数、満潮時の平均的な深さが記載されている。品川宿側から四番－壱番－五番－二番－六番－三番－七番－八番－九番－十番－十一番の順。十一番は中川河口と洲崎弁

天の間の海上である。四番から八番と九番までは西欧築城法に倣った配置となり、九番から十一番の並びが直線的にみえる。陸側からの距離は、四番が 20 丁、五番 30 丁、六番 30 丁、九番 40 丁、および拾壱番 35 丁となる。1 丁(町)は約 109m であるので、一番近い四番と六番で海岸から約 2km 離れていることになる。

・②「品川台場計画図－黒船来航図絵巻」　右上に「嘉永六年巳年八月新規御臺場築立被　仰出御用掛之御方様左之通リ」とあり、ペリー来航直後の嘉永 6 年 8 月の絵図である。しかし、すべての台場の配置は水野家図とほぼ同一であるため、描写内容は天保 9 年といえる。

・③「洲崎海岸絵図」新発見の絵図⑦に酷似している。絵図⑦との違いは、第八～第十一台場北側の四角印付き朱線が無い、第二－第七台場間の距離記載、水深記載無し、第三台場が四角形、洲縁辺を強調、屋敷名の省略、等である。絵図⑦で未確定であった第七台場の位置が決まり、台場位置の候補の可能性がある、第八～第十一台場北側の四角印付き朱線が無いことから、新発見絵図⑦より後に製作された、台場の最終計画案とみることができる。

測量線の距離は次の通りである。

石川島－第三 33 町余　御濱－第三 25 町 30 間

松平相模守－第一 24 町余　第二 19 町 50 間余

第三 20 町 40 間　第五 19 町余　第六 17 町余

台場間距離は次の通りである。

品川－第四 4 町余　第四－第五 8 町

第一－第二 5 町余　第二－第三 5 町余

第三－第六、第五－第六　記載無し

第三－第七および第八から第十一は 8 町間隔

・④「品川台場及沿岸絵図」　品川台場絵図のなかで一番描写範囲が広い。洲、澪筋、澪筋を中心に水深の記載、沿岸部の屋敷名、町打場と第一～十一台場がみえる。各台場は洲上かその縁に位置し、西欧築城法に倣った配置を明確には示していない。製作年代は、新発見絵図⑦と同じ頃となる。

・⑤「内海御臺場(本芝ヨリ品川宿迄)海岸圖」図-4 参照。

絵図には実際に建設された第一番～三番、五、六番台場と御殿山下台場、海岸部の屋敷と町の名、測量線と距離、土出し場、カクレス(隠れ洲であろう)等が記されている。第四番台場は無い。沿岸部の屋敷名をみると

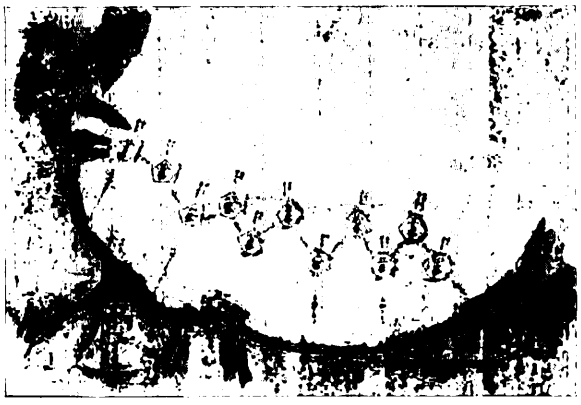

図-3　「品川台場計画図」[8]

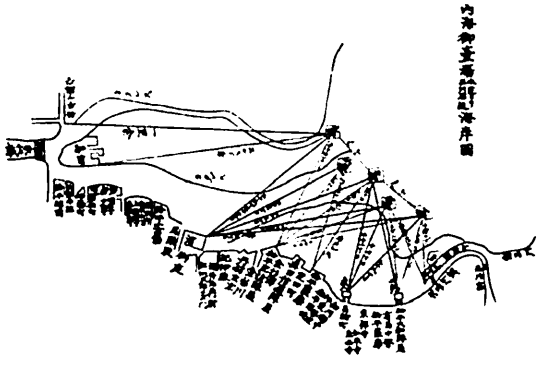

図-4　内海御臺場(本芝ヨリ品川宿迄)海岸圖 [10]

濱御庭の隣が江川太郎左エ門、酒井左エ門尉となっているので 1855-6(安政 2・3)年以降、安政地震後の修復時と考える。前掲の①、②と比較して、注目すべきは海岸からの距離である。高輪から五番台場の距離は 17 丁余となっており、前 2 図の 30 丁の約半分、則ち海岸により近接して設置された状況が描かれている。

・⑥「惣体御炮台一覧絵図」　第一～第六および御殿山下台場と陸側に多くの炮台がみられる。絵図の描写は模式的で、海上の台場は洲の先端、端にあり、西欧築城法に倣った配置としては描かれていないように思える。絵図の製作年代は、第四台場の名称が復活するのが 1863(文久 3)年である [11]から、それ以降と考えられる。

(2) 新発見絵図の位置付け

・東京港水路図との対比　新発見絵図の測量線を勝海舟の絵図⑤と比較すると、同じ測量線の距離は等しい。なお、松平相模守屋敷は絵図⑤では松平肥後陣屋である。

東京港水路図(1/13237, 昭和 2 年)との対比を図-5 に

表-1　絵図の比較

	図　　名	描かれている台場	測量線	水深	屋敷名	町打場	洲	方位
①	「品川台場計画図」	1～11	△	○	－	－	－	－
②	「品川台場計画図－黒船来航図絵巻」	1～11	△	－	－	－	－	－
③	「洲崎海岸絵図」	1～11	○	－	△	○	○	○
④	「品川台場及沿岸絵図」	1～11	－	○	○	○	○	○
⑤	「内海御臺場(本芝ヨリ品川宿迄)海岸圖」	御殿山下，1～3，5，6	○	－	○	－	○	－
⑥	「惣体御炮台一覧絵図」	御殿山下，1～6	－	－	△	－	○	－
⑦	新発見の図	1～11	○	○	○	○	○	○

註：①首都大学東京図書情報センター水野家文庫蔵，②横浜開港資料館蔵，同様図は東京国立博物館蔵(列品番号P-762)，③東北大学付属図書館狩野文庫蔵，④立正大学図書館田中啓爾文庫蔵，⑤『陸軍歴史』所収，⑥都立中央図書館東京特別文庫室蔵，⑦神吉和夫蔵

記号説明　○：あり，△：一部，－：なし

示す。御濱角、松平相模守屋敷角を基点とする測量線、台場間についてはその一方を基点として線を引いた。松平相模守屋敷角から第一～三、五、六台場への測量線、第一-第二、第五-第六、第六-第三台場間の距離は東京港水路図と殆ど一致する。第三台場への測量線および第二-第三台場間距離は数%の誤差がある。この誤差は、台場の建設時(嘉永 7 年 2 月 19 日)に第一～第三台場の方位に狂いが確認された[12]ことが伝えられているので、第三台場の位置が修正できなかったことを示していると考えられる。また、図-5 の第四台場位置は品川から約 8 町離れている。第四台場は御殿山下台場の建設にともない、海側に位置を変更したと考えられる。さらに、図-5 での第三-第七台場間距離は③の 8 町より短い。

したがって新発見絵図は実際に建設された品川台場に近い計画図面といえる。

・製作年代　①が一番古く 1838(天保 9)年、②は 1853(嘉永 6)年、⑤は 1855-6(安政 2･3)年以降、および⑥は 1863(文久 3)年以降と最も新しい。③、④および⑦は 1850-52(嘉永 3-5)年以降で、前述のように⑦と酷似する③は⑦より後は確実である。

③と⑦は記された大名屋敷名からは 1830(天保元)年を上限、1845-6(弘化 2･3)年を下限とする期間を示しているため、1845-6(弘化 2･3)年にはこれら絵図の町打場を除くものが完成していた可能性はある。①と⑦の端的な違いは、台場の海岸よりの遠近と西欧築城法との差違である。このことは、天保 12 年、高島秋帆に洋学に基づく砲術を学んだ江川英龍が、西欧築城法を単に模倣するのでなく、より詳しい巡視と測量に基づき改良したと考えられるのではないだろうか。なお、④は第一台場と陸の間に 2 本の簡単な測量線がみられるのみであり、台場の位置も洲の縁とか中に置かれ、相対距離の表示もない。したがって全体構想図ともいえる。それに対し、新発見の絵図⑦は勝海舟の図⑤とも測量線距離が一致するように、建設された台場をより具体的に示す計画図面である。しかし、実際に関係大名等に開示されたのは②、④の概念図に過ぎなかったと考える。

ペリーが去った直後の嘉永 6 年 7 月 23 日、若年寄本多忠徳、勘定奉行川路聖謨、代官江川英龍らは、江戸内海の沿岸を巡視し、8 月 21 日には第一～三台場の築造を開始する[13]。この間に、前掲の「江川氏秘記」に示されるように台場建設を巡って江川英龍と勘定奉行川路の論争が起きている。この時点で、江川英龍は①、③、④、および⑦の製作を終え保持していたはずである。

幕府の財政事情により断念させられた江川英龍の計画は、まず「沖ノ洲亀甲洲夫ヨリ富津ノ洲又ハ相州海岸猿島等ヘモ堅牢ノ砲臺取設ケ其上豆州下田湊浪速等ヘモ追々堅実ノ砲臺取建候積」の砲台群であり、次いで比較的水深の浅い位置に計画された第 8～11 台場である。

江川英龍は品川台場の建設に当たり、陸側の御殿山下台場を新たに計画し、それにともない品川宿沿岸から 250 間離す計画であった第四台場の位置を 480 間(8 町)

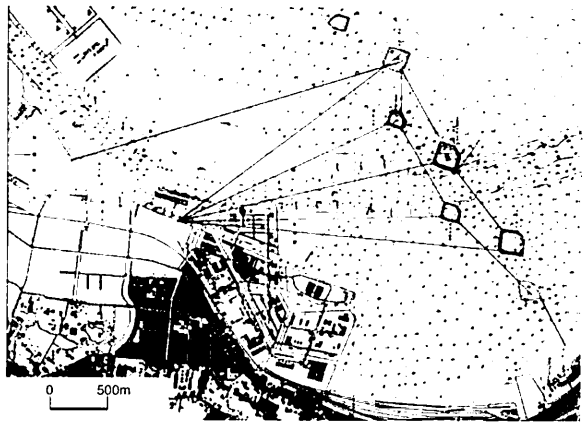

図-5　東京港水路図(昭和 2 年)との対比

に変更したと考えることができる。

新発見の品川台場絵図(仮称)は実際に建設された品川台場につながる第 1 級の史料といえよう。

5. おわりに

新発見の品川台場絵図(仮称)は東京都立中央図書館に寄贈する予定である。本史料が一般に公開され、さらに研究が進められることを期待したい。

謝辞　本稿作成にあたり、首都大学東京図書情報センター、東北大学附属図書館狩野文庫、立正大学図書館田中啓爾文庫、および国立国会図書館には資料調査でお世話になった。記して謝辞とする。

参考文献および註

1)仲田正之：『江川坦庵』、吉川弘文館、1985、佐藤正夫：『品川台場史考』、理工学社、1997、『台場-内海御台場の構造と築造』、港区立港郷土資料館、2000
2)勝安芳編：『陸軍歴史』、陸軍省、［巻十］pp. 83-85、1889
3)『東京市史稿　市街篇　第 42』、東京都、pp. 1187-1192、1955
4)淺川道夫：品川台場にみる西欧築城技術の影響、土木史研究講演集、Vol. 27、pp. 247-253、2007
5)②、④、⑥は『台場-内海御台場の構造と築造』、港区立港郷土資料館、pp. 16-17、2000 参照
6)http://www.lib.metro-u.ac.jp/mizuno/mizuno.htm 参照
7)http://www2.library.tohoku.ac.jp/kano/kochizu/CJF08833001/CJF08833001-1.html 参照　別途、詳細確認のため国立国会図書館でマイクロフイルムからの複写を行った。
8)前掲 6)
9)前掲 6)の解説文による。
10) 前掲 2)所収
11) 佐藤正夫：『品川台場史考』、理工学社、pp. 146-150、1997
12)高松彦三郎「内海御台場築立御普請御用中日記」(国立国会図書館蔵　請求番号 YD-古-5650)
13)前掲 5)p. 104